

論文審査の結果の要旨

氏名：山 田 涼 馬

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：記憶に及ぼすスキーマの影響

審査委員：（主査） 教授 巖 島 行 雄

（副査） 教授 内 藤 佳 津 雄 教授 羽 生 和 紀

聖心女子大学教授 高 橋 雅 延

本論文はすでに獲得され体制化された知識の集合であるスキーマが、出来事の記憶形成に与える影響を認知心理学的研究の枠組みにより検討したものである。検討に使用された測度は記憶の正確さおよび記憶想起に伴う各種の想起意識であった。記憶の形成に及ぼすスキーマの研究は Bartlett(1932)によって系統的に研究され、スキーマが省略、合理化、加工、創作、時間的順序の変更などによって記憶を変容させることを明らかにした。その後、多くの検討がなされ、記憶の変容に関して、選択性、抽象化、解釈、統合、再構成といったスキーマの働きが、不正確な記憶形成に寄与することが指摘されてきている。ただ、スキーマが実際にどのように働くのかについてのダイナミズムに関してはまだ十分に解明されていない。

従来のスキーマ研究は、場所スキーマが当該の場所に配置された物品との関係で形成される記憶にどのように影響するのか、もしくは場所スキーマがその場所でなされる行為との関係でどのような影響を持つのかを独立に扱ってきた。本論文では、場所、物品、行為というスキーマのそれぞれが三者の関係においてどのように作用するのかを、実験心理学的手法により検討した。目的の達成のために事前の調査を行い、実験のための材料を周到に決定した。これは検討対象となるスキーマの選定が決定的な重要性を持つからである。

研究は大きく二つに分かれている。研究1では場所スキーマが行為と物品に及ぼす影響を、台所というシーンをを用いて検討した。ここでは3つの実験と二つの刺激作成のための調査が行われた。具体的な手続きを、実験1を例に示す。まず、参加者は台所のシーンで、場所に一致した物品5つと不一致の物品5つが写っているシーンで男性が場所一致の行為を行っているシーンを見た（50枚のスライドで1枚につき1秒間提示）。この後に再認テストが行われた。再認テストには、1) 場所一致行為ターゲット、2) 場所一致物品ターゲット、3) 場所不一致行為ターゲット、4) 場所不一致物品ターゲットおよび1) から4) のディストラクタ（これらが提示したものに類似しているが異なった妨害物品である）それぞれ5物品 x 8条件の40物品が、ことばに書かれて提示された。それら物品の「新」（スライドの中に見なかった）、「旧」（スライドの中に見た）の再認判断が行われた。さらに「旧」判断がなされた場合には（つまりスライドにそれを見たとの判断）、その判断物品についての想起意識についての質問がなされた（Remember/Know 判断および感覚・感情判断など）。結果はターゲットの再認に関しては、1) 場所一致物品ターゲットよりも場所不一致物品ターゲットで Remember（想起に際して経験の際の具体的情報が想起される）の想起意識判断を伴うヒットが多かった。著者の主張する不一致物品への注意の集中や精緻化の結果と解釈された。また、妨害刺激に対するフォルスアラームに対しては、物品でも行為であっても、場所一致のディストラクタに対して多くのフォルスアラームが生じた。しかし、想起意識については、ディストラクタに対しては Remember 判断が生じなかった。実験1の結果は、場所一致ターゲットについては物品よりも行為の方で Remember 判断が多く、場所一致行為ディストラクタよりも場所一致物品ディストラクタで多くのフォルスアラームが生じることを示した。場所スキーマの影響は行為スキーマよりも物品スキーマにおいて影響力が大きいということである。

以上のような方法論に基づき、実験2では場所一致ターゲットのみが提示される場合のスキーマ効果が、実験3では場所不一致ターゲットのみが提示される場合の効果が検討された。実験2ではターゲットに関する再認成績で、場所一致条件での行為で物品よりも多く再認がなされた。ただフォルスアラームを見ると、行為でも物品でも、いずれにおいても場所一致ディストラクタで不一致のディストラクタよりも多くフォルスアラームが生じた。Remember判断に関しては、場所一致物品ターゲットよりも場所一致行為ターゲットで多く生じており、場所一致行為ターゲットの優位性が示された。行為よりも物品の記憶で場所スキーマの影響が大きかった。

実験3では、実験1や2と同様、場所不一致ディストラクタよりも場所一致のディストラクタに対してフォルスアラームが生じた。場所一致のターゲットが提示されていなくても、場所スキーマの活性化が促進されたために、この結果が生じたと考えられる。実験1や2と同様に、この実験でも場所・行為・物品というスキーマの階層性仮説を指示する結果が得られた。

研究2の実験4と5は、実験1から3まで使用された台所スキーマから離れて、新たな場所スキーマを用意して、物品が使用されるスキーマとの一致・不一致の効果を検討した。実験4では場所スキーマと行為から活性化すると仮定される使用スキーマの記憶への影響が検討された。洗面所のシーンで行われることが期待される行為（場所一致行為条件）とそのような行為が期待されない（場所不一致行為条件）のいずれかが参加者に提示された。配置された物品は、1) 行為一致物品、2) 場所一致行為不一致物品、3) 場所不一致行為不一致の3種類が配置され、これらが参加者に示された。結果は、場所一致行為条件では、場所一致行為不一致物品ターゲットよりも行為一致物品ターゲットでRemember判断が多かった。このことは使用スキーマよりも場所スキーマに一致しないことによって物品の記憶が精緻化されたために生じたと解釈された。また場所不一致行為条件において行為一致物品ディストラクタよりも場所一致行為不一致ディストラクタに対してフォルスアラームが多く生じた。この事実は使用スキーマよりも場所スキーマが活性化して、フォルスアラームを多く生じさせたと解釈された。

実験5では行為における場所スキーマと使用スキーマの影響が検討された。ここでは4種類の異なるシーンに対する場所スキーマが検討された。結果は場所一致物品一致行為、場所一致物品不一致行為、場所不一致物品一致行為、場所不一致物品不一致のいずれにおいても、高い再認率を示した。また想起意識に関しては、物品不一致行為よりも場所不一致行為で情動的な判断がなされることが明らかになった。つまり、使用スキーマよりも場所スキーマの影響が強く現れるという結果であった。

以上の実験研究から、場所スキーマの影響は行為の記憶よりも物品の記憶において大きく、行為の記憶においても物品の記憶においても、場所スキーマの影響は使用スキーマの影響よりも大きいことが明らかになった。これは申請者の仮定するスキーマの階層説を指示する結果であった。

以上のように、本論文は緻密な実験計画に基づき、スキーマの記憶に及ぼす影響を再認課題および想起意識の観点から明らかにした。著者の仮定するスキーマの記憶への影響に関する機能的階層性に関してはほぼ実証的支持を得たものと判断される。人間の記憶におけるスキーマの役割に新しい心理学の知識を提供したのである。このことはすでに山田氏の複数の論文が国際雑誌に掲載され、引用されるという実績からも明らかのように、スキーマの記憶に及ぼす影響について新しい知識を提供し、それが認められていることを示すものである。

以上のような成果は、認知心理学領域における学識の深さと新しい心理科学的研究を遂行する能力の高さを示すものであり、申請者が専門的な職務に従事するための十分な資格を有していると判断される。

よって本論文は博士（心理学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上